皐月

〔さつき〕令和３年５月

「五月」「早月」などと書いても「さつき」と読むが、この時期に田に苗を植えることから「早苗月」とも言われ、この呼称になった。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

ありがたやよろづの神が入りそめて 入りての後は神や守らん

～ 三河花祭歌 ～

今月のことば

ありがたやよろづの神が入りそめて
入りての後は神やまもらん

―三河花祭歌―

信仰とは神々の神威・神徳をまず受け入れることから始まる。信仰によって生かされているという有難さが、解って来ると、日々の生活が、「お陰さまで」という言葉通り、感謝の生活が身についたものになって来る。

正直でも、誠でもよい。神の御教えによって、その一つでも身についたとき、神のお陰であるという有難さが、身に沁々と味わわれて来る。それからは一歩一歩、毎日が神の懐のうちで生活しているのも同然となる。正直・清浄・誠の神の教えを、一つでも実行するかしないか、これが「ありがたさ」や「お陰さまで」の生活が、本当に味わえるかどうかの分れ目である。

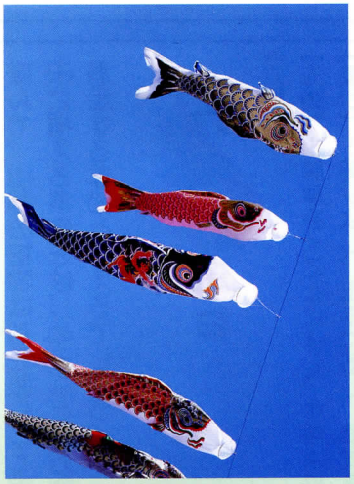
（神道百言　一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

端午

五月五日
こどもの幸福を願って立てた鯉のぼり

五月五日は「端午の節供」といわれ、もともとは田植えを控えた時期に、心身を清め田の神様をまつる行事でした。魔除けのためにお供えする菖蒲（強い香りやとがった葉先が邪気を祓うと信じられていた）と、尚武とをかけて武者人形を飾るなど、次第に男の子の節供として広まり、「立身出世」を願って鯉のぼりを立てました。又、鯉のぼりは本来、お田植祭に神様を迎えるためのお清めが済んだ家の目印から発達したものともいわれています。



田植

稲の苗（早苗）を苗代から本田へ、村総出で共同作業

春の最も大きな行事は田植えでした。一年の稲作の始りである田植えの前にはお祭りが行われ、家族総出、村総出で田植えが行われました。機械化が進んで田植えの風景が様変わりした今でも、各地で行われる田植え祭には昔ながらの様子が生き生きと残っています。

端午の節供の行事食

行事食とは、季節折々の伝統行事やお祝いの際にいただく特別な料理のことを言います。

それぞれの旬の食材を取り入れ物が多く、季節の風物詩の一つにもなっています。本来、年中行事は「神様を呼び、お供えを捧げる日」で「ハレの日」と呼ばれ、普段の食卓にはないご馳走を並べて、日常の「ケの日」と区別してきました。

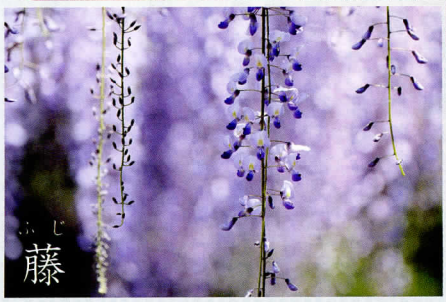
農耕民族である日本人は、季節の変わり目に行事を行うことで収穫に感謝し、「ハレの日」というご馳走を食べる日を設けることで、身体に栄養と休息を与えてきました。行事食か体調を崩しやすい季節の変わり目を、賢く乗り切る「食の知恵」でもあります。

端午の節供には、一年目の初節供（生まれて初めての節供）に「難を避ける」という意味のある『ちまき』を、二年目からは柏の木が新しい芽が出るまで古い葉を落とさない事から「跡継ぎが絶えない」「子孫繁栄」の縁起物とされる柏の葉を二つ折りにして包んだ『柏餅』が食べられます。

なお、この「節供」ですが、現在では「節句」の表記が用いられることが多いようです。しかしながら、神様にお供えを捧げるという古来よりの考え、本来の表記では「節供」であることを忘れてはいけません。

五月の鯉の吹き流し

鯉のぼりは口を大きく開けてはらわたがないことから、腹の中がさっぱりしていてわだかまりのないことの例え。



令和 3 年
2021年

5 月

日	月	火	水	木	金	土
						1 仏滅 八十八夜 とり
2 大安 いぬ	3 赤口 ● 憲法記念日 る	4 先勝 ● みどりの日 ね	5 友引 ● こどもの日 端午 立夏 うし	6 先負 とら	7 仏滅 う	8 大安 たつ
9 赤口 み	10 先勝 うま	11 友引 ひつじ	12 仏滅 さる	13 大安 とり	14 赤口 いぬ	15 先勝 三りんぼう る
16 友引 ね	17 先負 うし	18 仏滅 とら	19 大安 う	20 赤口 たつ	21 先勝 小満 み	22 友引 うま
23 先負 ひつじ	24 仏滅 さる	25 大安 とり	26 赤口 いぬ	27 先勝 三りんぼう る	28 友引 ね	29 先負 うし
30 仏滅 とら	31 大安 う					

《 3日 憲法記念日 》
日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する日です。

《 4日 みどりの日 》
自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ日です。

《 5日 こどもの日 》
こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日です。

二十四節気

【立夏 りっか】… 五日
旧暦四月巳の月の正節で、このころになると、山野に新緑が目立ちはじめ、風もさわやかになって、いよいよ夏の気配が感じられてきます。

【小満 しょうまん】… 二十一日
旧暦四月巳の月の中気で、このころは陽気盛んで、山野の植物は花を散らして実を結び、田に植える準備をはじめるなど、万物がほぼ満足する季節といえるでしょう。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日

5月の季語・時候の挨拶

晩春、残春、惜春、暮春、藤花、葉桜、陽光、新緑、青葉、若葉、立夏、初夏、向暑、軽暑
新緑の候／向暑のみぎり／八十八夜も過ぎ／初夏の風に吹かれて／風薫る五月／青空をバックに鯉のぼりが鮮やかです／五月晴れの日が続き・・・・など

「夏も近づく八十八夜」は、いつ？

よく知られた茶摘み歌に「夏も近づく八十八夜・・・・」という歌がありますが、八十八夜とは、立春から数えて八十八日目にあたり、現在で言えば五月一日ころになります。

実際、歌にうたわれているように、この日に摘んだ茶の葉は上等とされています。八十八夜は、まさに「夏も近づく」ということで、農村では田の苗代作りや、畑作物の種まきを始める重要な時期です。

とくに「八十八夜の別れ霜」といわれるように、霜による農作物の被害から解放されるときであり、「八十八」は漢字の「米」に通じ、末広がりの「八」が重なる縁起のよさも加わって、昔から農事の目安として欠かせない日でした。この日は、田の神に供え物をして豊作祈願をしました。

安産祈願 5月の戌（いぬ）の日

2日（日）
14日（金）
26日（水）

＊戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう